



七徳堂鬼瓦

科学者という仕事

時代はほぼ10年で確実に変わっていく。世代間のギャップが徐々に開いていくのは世の常である。その中で、新しい物事や考え方を生み出す独創性は、大衆化された時代の流れに流されることなく受け継がれてきた。人間に独創性という資質がなかったら、科学者という仕事は存在しなかっただろう。独創性の火を絶やさないことは、大学の使命でもある。

駒場の講義を初めて受ける理系の新入生に対して、将来大学院に進学して研究者になりたいかと尋ねると、ほとんどの学生が手を挙げる。ところが、この貴重な動機づけを博士課程の後まで10年を越えて持ち続ける学生は少ない。無味乾燥な講義が彼らのモチベーションを奪ってしまうのか、それとも学問より楽しいこと、楽に稼げることに学生の関心が奪われてしまうためなのか。安定志向でリスクや困難を回避する昨今の風潮も関係しているだろう。

17世紀はじめの天文学者J・ケプラーは、惑星の運動を見事に定式化した自らの第1法則と第2法則で満足せず、その後10年近くかけて、すべての惑星に普遍的に成り立つ第3法則を見出した。それから300年後のA・アインシュタインは、10年の歳月をかけて自らの特殊相対論を一般相対論に拡張することに成功した。その100年後に生きているわれわれは、こうした科学者たちの努力をどのように受け止めているだろうか。自分が考えた難問に対して自力で答を見つけるためには、リスクや困難を恐れずに独創性を磨き続けるしかない。

最近、『科学者という仕事』のタイトルで中公新書に本を書いた。科学研究と研究者のフィロソフィーから、研究や発表のセンス、研究の倫理や教育に関する問題、そして科学者の社会貢献について、これまで考えてきたことをまとめた。進路に迷う学生は、科学の苦楽や光と陰を分かった上で、科学にどこまで確かな価値や目標を見出すだろうか。科学者という仕事について深く考え、語り合う場が大学に必要である。

酒井邦嘉（大学院総合文化研究科）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1341 2006年7月26日
東京大学広報委員会

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務部広報課
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>